

ペトラルカにおける詩人の責務

——制度・書簡・論争の言説空間から

飯 畠 剛 将

0. はじめに

詩人を知の代表者とみなし、その公共的な有用性を擁護する営みには、古代以来の系譜がある。キケローは『詩人アルキアース弁論』*Pro Archia*（前62年）において、ギリシア出身の詩人アルキアースのローマ市民権を法廷で弁護するにあたり、詩人という存在そのものの価値を共和政ローマの公共空間の中で正当化する必要に迫られた。この弁論の核心をなすのは、詩人は他の技芸の従事者とは異なり、教義や規則や技術ではなく「天性に基づき、心の躍動に揺り動かされ、いわば神の息吹をふきこまれる」という主張であり¹⁾、エンニウスが詩人を「神聖な人々」と呼んだことを根拠に、詩人の名は「いかなる野蛮さによっても汚されたことがない」神聖なものとして扱われるべきだと結論づけるものであった²⁾。この弁論は、詩人の市民的有用性を法的・制度的な言説の中で正当化した古代ローマにおける最も体系的な先例の一つであり、その影響は中世後期のイタリアにまで及ぶ。

14世紀初頭のパドヴァにおいて、この系譜を直接的に継承したのがアルベルティーノ・ムッサート（Albertino Mussato, 1261–1329）であった。1315年に詩人戴冠を受けたムッサートは、書簡第7番において、詩的虚構の正当性を弁護し、「聖なる詩人たちはかつてつくりごとを創り出した。その神秘的な言葉が善良な精神を惹きつけるようにと。というのも、驚くべき詩は、その言葉が響かせるものとは異なることを意図するとき、人々をよりいっそう注意深くさせるからである」と記した³⁾。ここでムッサートは、キケローが称えた「聖なる詩人」という概念と、アウグスティヌスが『キリスト教の教え』*De doctrina christiana* 第2巻で論じた聖書の寓意的言語の難解さの効用とを接合し、詩的虚構が聖書と同じ言語形式——すなわち寓意——を共有していることを根拠として、詩の神学的正当性を主張した。

ペトラルカは、このムッサートの路線を明確に継承している⁴⁾。たとえば、Morganti (2018: 160–161) が詳細に分析したように、ペトラルカはキケローの『アルキアース弁論』18–19節の同一箇所を、少なくとも三度にわたって引用ないし反響させている。第一に1341年の『戴冠式演説』*Collatio laureationis*において、第二に1344年頃の『韻文書簡集』*Epistolae metricae* II, 10において、そして第三に1352–57年の『医者論駁』*Invective contra medicum* 第1巻においてである。しかも、この三つの場面においてキケローの権威はつねにラクタンティウス『神学提要』*Divinae Institutiones* I, 11, 24–25（詩人の職務は真実を婉曲の比喩で変換すること）およびアウグスティヌスの寓意的解釈論と組み合わせられており、三者の配列は意図的かつ一貫した戦略であったことがうかがえる。

しかし、ペトラルカはこの系譜を単純に反復したのではない。キケローがアルキアースという個別の詩人の即興能力や記憶力を称え、そこから詩人一般の社会的有用性へと議論を拡大したのに対

し、ペトラルカは、詩の「神的本性」と詩人の存在そのものの認識論的地位に焦点を当てている。

また、Ronconi (1976: 108) が論じるように、ムッサートが古代詩人＝最初の神学者という等式を比較的直線状に主張したのに対し、ペトラルカは詩と神学が同一の言語的操作——すなわち寓意 (alieniloquium) ——を共有しつつも、その対象において区別されると主張している⁵⁾。ペトラルカは詩を神学に従属させるのでも同一視するのでもなく、両者を同じ言語の原理に基づく並行的な営みとして位置づけることで、詩学の独自の認識論的領域を確保しようとしたのである。

以上のような「詩の擁護」の系譜を踏まえたうえで、ペトラルカの詩人論に関する従来の研究を概観すると、個別作品ごとの分節的な考察が支配的であったことが確認される。すなわち、『戴冠式演説』は人文主義的雄弁の出発点として⁶⁾、『牧歌』*Bucolicum carmen* 第一歌および *Fam.* X, 4 は寓意・自己注解・神学との関係をめぐる詩学的テキストとして⁷⁾、『医者論駁』は修辞学と医学、あるいは人文主義とスコラ的知の対立をめぐる論争文として⁸⁾、それぞれ独自の文脈で読まれてきた。

近年の成果として特に参照すべきは、Lummus (2020) の著書である。同書はムッサート、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョを対象に、14 世紀イタリアにおける「詩の擁護」が都市という政治的・市民的文脈においていかに機能したかを通史的に追跡するものである。ペトラルカを論じる第三章 (“Francesco Petrarch, Poet beyond the City”) は、本稿と同一の一次資料群——*Privilegium laureae*, *Collatio laureationis*, *Fam.* X, 4, *Bucolicum carmen* I, *Invective contra medicum*——を扱い、ペトラルカが理想化された「都市の外」に立つことで現実の都市的権威を凌駕しようとしたという論点を展開している。

しかし、Lummus (2020) の分析軸はあくまでも詩人と都市との市民的關係にあり、詩人に付与された「読む・論じる・解釈する」権能がスコラ学的知の序列に対していかなる認識論的挑戦を構成していたかという問題は、射程の外に置かれている。より広く言えば、従来の研究は個別テキストの精緻な読解において優れた成果を挙げてきた一方で、同一の典拠群が制度文書・書簡・論争文という異なる言説空間において系統的に再使用されるという作品横断的な論理を、正面から問うてこなかった。詩人を単なる作者としてではなく、古人の書を読み、論じ、解釈し、そのうえで新たに記す資格をもつ存在として捉えるならば、問題は詩作品の内容分析にとどまらず、知の媒介者としての公的機能へと拡張される。この公的機能がいかなる制度的・知的条件のもとで要求され、いかなる言説的实践を通じて遂行されたのかを問うことが、本稿の中心的な関心である。

本稿は、この関心に基づき、ペトラルカにおける「詩人」の責務を、三つの場面の連関において再構成することを目的とする。第一に、『戴冠に関する特権状』および『戴冠式演説』を通じて、詩人がローマという公共空間において、単に詩を作る人ではなく、読む・論じる・解釈する権能を付与された制度的主体として立ち現れる過程を確認する。その際、この権能の付与が中世スコラ学の知の序列との関係においていかなる意味を持つかについても検討する。第二に、弟ゲラルド宛書簡群、とりわけ『親近書簡集』(以下 *Fam.* と表記) X, 3-5 と『牧歌』第一歌の自己注解を通じて、その制度的権能が具体的な宛先に応じていかに調整され、実践されるかを検討する。第三に、『医者論駁』において、同じ詩人像が外部からの攻撃に晒される論争空間の中で、いかに防衛され、拡張されるかを明らかにする。

したがって本稿の課題は、ペトラルカの詩人論を静的な理念として要約することではない。むしろ

ろ、制度文書、書簡、論争文という異なる言説空間のなかで、詩人という役割がどのように語り直され、そのつど何を守り、何を読み、いかなる資格で解釈し、どのようなかたちで記すのかを問うことである。そのとき、ペトルルカの詩人論は、キケローやムッサートに由来する「詩の擁護」の伝統を継承しつつも、単なる文学観ではなく、公共空間における知の媒介と秩序づけを担う実践論として捉え直されるであろう。

1. 『戴冠に関する特権状』と『戴冠式演説』における詩人の役割

フランチェスコ・ペトルルカは1341年、ローマのカンピドーリオにて桂冠詩人として戴冠された。古代ローマ文化の再興を象徴するこの出来事は、しばしば人文主義的精神の象徴的宣言として語られてきた⁹⁾。だが、この儀式の真の意義は、それが単なる私的な文学的達成の顕彰にとどまらず、永遠の都ローマという公共空間において、制度的な権威が交錯する場であった点に求められる。すなわち、この劇場的空間においてペトルルカが行ったのは、詩の個人的な朗唱ではなく、制度文書によって画定された「公的職務」の受諾であった。その法的根拠をなすのが、ローマ元老院による『戴冠に関する特権状』*Privilegium laureae*（以下『特権状』）である。実際、同文書はペトルルカに対し、次のような多層的な権威を付与している。

前記のフランチェスコを本日、すなわち復活祭の厳かな日に、最も有名な場所であるローマのカンピドーリオにて、王と我々とローマ市民の名において、教師、詩人、および歴史家であることを宣言する。我々は彼に教師という輝かしい称号を授け、特に詩の象徴として、私、前記の伯爵かつ元老院議員オルソは、我々と同僚のために、我が手で彼の頭に月桂冠を授けた。¹⁰⁾

ここで注目すべきは、彼に授けられたのが「詩人」のみならず「教師」および「歴史家」という重層的な称号であった点である。この事実は、ペトルルカが引き受けた「詩人」という役割が、都市の歴史と知を司る「制度的な職務」として再定義されていたことを物語っている。同文書は、詩人の探究（studium）が本来的に持つべき社会的責務を、次のように明文化している。

肉体的行為について、今は措くとして、精神の力によって遂行される多くの営為のうち、かつて我らの共和国において最も栄え、あらゆる称賛に値したのは、歴史家、とりわけ詩人たちの学芸であった。彼らの勤勉と労苦によって、彼ら自身のためにも、またその詩によって顕彰するに値すると認めた他の高名な人物たちのためにも、名声の不死性が追求されたのである。¹¹⁾

特筆すべきは、ここで詩人が「歴史家（historicus）」と分かちがたく結びつけられている点であろう。この詩人と歴史家の結合自体はペトルルカの発明ではなく、ムッサートの詩人戴冠にすでに先例がある¹²⁾。しかし、ペトルルカの場合はローマという権威の座において制度文書の形式で確認されることで、スコラ学的な知の序列への挑戦としての性格を帯びる。中世において詩学はしばしば虚構や寓意の領域に限定されていたが、本文書はそれを国家の記憶管理に関わる学問と并列に置いている。すなわち、詩人の任務とは「名声の不死性（nominis immortalitas）」の追求、すなわち

徳 (virtus) ある人物の功績を不朽のものとし、後世へと伝達する国家の倫理的記憶の保持者となることに他ならなかったのである。

ペトラルカは、この「名声の不死性を管理する制度的責務」という制度的要請に対し、独自の媒介詩学をもって応答している。実際、彼は詩人の営みについて、ラクタンティウスの以下の定義 (*Inst.*, I, 11, 24-25) を引用する。

詩人の務めとは、実際に起こった事柄を、婉曲的な比喩的表現によって、ある種の優美さを伴った別の様相で、違うものへと変化させ、示すことにある。¹³⁾

ここで詩人は虚構の創作者ではなく、「実際に起こったこと」を取り扱う者として位置づけられる。これは、詩が虚偽に基づくという批判を退けると同時に、事実をそのまま記述する歴史記述や、真理を論理的に証明する哲学とも異なる第三の道を示すものである。

こうした詩学独自の認識論的地位は、『特権状』に記された「覆い (velamen)」という概念によってさらに補強される。同文書は、世俗の無知が詩を「嘘」と混同している現状を憂い、その真の職能を次のように擁護している。

悲しいことに、我々の時代においてこの詩的な名誉は、才能の停滞によるものか時代の悪意によるものか定かではないが、絶え間なく抑圧されてきた。その結果、詩人の名そのものが何を意味するのかさえ我々の同胞にはほとんど知られず、多くの者が詩人の務めとは虚構を創ること、すなわち嘘をつくことに他ならないと考えている。もしそうであるならば、その務めは月桂冠にもいかなる名誉にも全く不相応なものに見えるであろう。しかし彼らは、詩人の務めとは、最も博識で賢明な人々から我々が学んだように、事物の真実を快い色彩の下に隠し、美しい虚構の雲のように覆い隠しながら、高らかな詩歌によって称え、甘美な弁舌の心地よさで振りまくことにあるということを知らない。¹⁴⁾

この記述に準ずるかたちで、ペトラルカはこの「覆い」を、知を卑俗化から守り、読者の理解力に応じて真理を段階的に開示するための意図的な装置として再定義しており、詩学が哲学や神学と同一の真理を共有しながらも、提示の形式（作用）においてのみ異なると主張し、その独自性を「空」の比喩を用いながら、次のように詳述している。

しかし、もし、時間があつたのなら、私が高慢なことをあなた方のお耳に入れるのを気にしなかったのなら、私は、詩人たちが創造の覆いの下で、あるときは自然学を、あるときは倫理学を、あるときは歴史を取り扱ってきたことを容易に示すことができるでしょう。こうして、私がたびたび口にしていたことは本当のこととなるのです。詩人や歴史家や哲学者の務めと、倫理学と自然学の務めとの間には、曇った空と晴れやかな空の間に内在しているものが存在しており、どちらにおいても明るさは同じであるべきなのですが、見る者たちの理解力のために〔その明るさは〕異なってしまうのです。¹⁵⁾

ここでは、詩の価値は命題の正確さではなく、真理がいかなる形式を通して提示されるか、すなわち「作用」に力点を置いている。詩人の卓越性とは、真理が受容者の魂に最適に作用するよう媒介の形式を戦略的に調整する能力にこそある。

このように、詩の本質が真理の媒介であり形式の変換であると定義されるとき、「覆い」の概念は必然的にその射程を拡張する。すなわち、詩人が自ら真理を「覆う」能動的行為としての *velamen* から、既存の権威的テキスト——聖書を含む——に内在する寓意的層を「解き明かす」対象としての *velamen* へと移行する¹⁶⁾。この移行こそが、媒介のプロセスを統御する主体の資格という問題を浮上させるのである。媒介のプロセスが戦略的であればあるほど、その「覆い」をいかなる権威に基づいて剥ぎ取り、再提示するのかという「解釈」の正当性が問われることになる。それゆえ、『特権状』がペトルカに与えた最終的かつ決定的な特権とは、新たな詩を著す権利だけでなく、次のような権限であった。

前記の王、元老院、およびローマ市民の権威により、この書面の定めに従って、彼に対し、前記の詩学および歴史、ならびにそれらに属するすべての分野において、古人の書物を読み、論じ、解釈する自由な権限、ならびに神の助けによってあらゆる世紀にわたって永続するであろう、新しい書物や詩を自ら著す権限を、あらゆる都市と地域の首長かつ教師であるこの極めて神聖な都においても、また他のいかなる場所においても授けるものである。¹⁷⁾

ここでペトルカは、古人の書物を「読むこと (*legendi*)、論じること (*disputandi*)、解釈すること (*interpretandi*)」の自由な権限を与えられる。ここで重要なのは、創作の権利よりもむしろ解釈の権限が強調されている点である。詩人は単に新たな詩を書きうる者にとどまらず、既存の権威を読み、解釈し、それを公共空間に提示する資格を持つ者として位置づけられているのである。

この「解釈権」の公的付与がいかに異例の事態であったかは、当時の知的世界を支配していたスコラ学の知の体制を背景に置いたとき、はじめて明らかになる。たとえば詩は、トマス・アクィナスのスコラ学体系において、知の序列の最下位に明確に位置づけられていた。この点についてエーコ (2022) は、トマスの諸著作に散見される詩への言及を整理しつつ、スコラ学的知の体制における詩の構造的な周縁性を論じている。

トマスは『神学大全』第一部第一問第九項の第一異論において、「類似を使って議論をするのは聖なる学問にとって適切ではない。なぜなら、それは『最下位の学問 (*infima doctrina*)』である詩学の特徴だからである」という内容を記している¹⁸⁾。ここで詩は、神学という最高位の学知に対する対極として名指しされている。エーコ (2022: 188) によれば、トマスにとって詩作の技法 (*modus poeticus*) とは、真理を捉えるには及ばない、いわば感性的な愉悦のための方法にすぎない。またエーコ (2022: 188-190) は、『神学大全』第二の一部第一〇一問第二項第二異論解答「詩は真理を欠いているので、人間理性によって捉えられない」をひきながら、トマスが詩について、聖なる教えにはふさわしくないと断じていることを指摘する。

ここでの「欠如」とは、詩が虚偽であるということではなく、詩が属する認識の次元が、神学とは異なるということである。トマスにおいて詩は、「制作物の理法 (*ratio factibilium*)」、すなわち制作と結びついた概念に属するのであって、純粋な思索と比較すると下位に置かれている¹⁹⁾。

こうしたスコラ学的な知の序列のもとでは、詩人は技術者であって解釈者ではない。テキストの表層の下に隠された神的真理を多層的に読み解く行為——いわゆる聖書の四義解釈の伝統²⁰⁾——は、神学者の専権事項であった²¹⁾。

こうした知の体制を踏まえるならば、『特権状』がペトラルカに付与した「読む・論じる・解釈する」権限は、スコラ学的な分類体系に対する正面からの挑戦として理解されねばならない。詩が「最下位の学知」にとどまるかぎり、詩人にはテキストの寓意的意味を開示する資格がない。ペトラルカが主張したのは、詩人もまた——神学者と同様に——「覆い」の下に隠された真理を解き明かしうる主体であるということであり、それはトマスの知の序列の根本的な転覆を意味していた。序文で確認したように、ムッサートはすでに詩的虚構と聖書の寓意的言語の共通性を論拠として詩の神学的正当性を主張していたが、ペトラルカはそこからさらに踏み込み、この正当性を「制度的権限」の次元で確保しようとした点に独自性がある。

この法的に担保された「解釈権」を武器に、ペトラルカがいかなるレトリック的实践を展開したのかについて確認しよう。演説の冒頭、彼はウエルギリウスの詩句 (*Georg. III, 291-292: «Sed me Parnasi deserta per ardua dulcis / raptat amor»*²²⁾) を引用し、次のように宣言する。

高貴にして尊敬すべき皆様よ、今日という日においては、詩的な流儀に則って進められなければならないかもしれません。それゆえ私は、自らの主題を、他ならぬ詩的作品から引き出したのです。²³⁾

ここで「詩的な流儀 (poetico more)」という宣言は、単なる修辭的謙遜ではなく、その場における発話の正当性を規定する前提条件として置かれている。ペトラルカは、共和政ローマの記憶が保存されたカンピドーリオを再定位し、古代の権威を現在へと再演する場面を設定したのである。

さらに注目すべきは、この演説が古典詩句を主題に据えつつも、中世的な説教形式を厳格に踏襲している点である²⁴⁾。これについて、Looney は次のように指摘する。

彼は『農耕詩』の一節を朗唱し、それから教父が聖書の一節を扱うかのように、その箇所について慎重かつ綿密な解釈を開始する。説教の訓練を受けた弁者のように、ペトラルカは中世の説教に類似した形式の演説を行い、その箇所との出会いを劇的に演出しつつ、一語一語を吟味し、あらゆる可能な意味を検討し、それが聴衆に与える効果を計算している。²⁵⁾

ペトラルカは、説教という既存の知的枠組みを維持しながらも、その核心にある権威の源泉を神学から詩学へと大胆に転換させた。この「形式の継承と内容の転換」という二重の操作こそが、ペトラルカによる権威体系の再配列の実態であった。

結論として、『戴冠式演説』における詩人像は、認識論的な正確さを競う学知とは異なる基準によって評価されている。詩は真理を体系的に「教える」ことを目的としない。むしろ、真理が受容者の魂に最適に作用するよう、その提示の形式を戦略的に調整し、解釈を通じて認識の過程を導くことこそが、詩人の固有の役割とされるのである。詩人の卓越性とは、情報の伝達者としてではなく、真理が効果を発揮するための「媒介のプロセス」を統御する権威ある主体として定義されているのである。

2. 『牧歌』 第一歌と弟ゲラルド宛書簡における詩人論

『特権状』や『戴冠式演説』においてなされた、制度的に宣言された権能が、自動的に実践の形式を規定するわけではない。本章では、『牧歌』第一歌および、弟ゲラルド宛書簡群 (*Fam.* X, 3-5) を通じて、「読み、論じ、解釈する」権能が具体的な宛先のなかでいかに行使されるかを検討する。

Lummus (2020: 131-134) はこの牧歌的空間の設定について、シルウィウス (兄ペトラルカ) が都市の知的活動の場と修道的孤独の場との間に立つ者として登場し、モニクス (弟ゲラルド) との対話がその緊張を演劇化していると分析している。本稿の観点からすれば、この空間的配置は詩人が詩の意味を「宛先の文脈に応じて段階的に調整する」という媒介的实践の舞台設定でもある。ペトラルカが修道者という宛先に向けて世俗の詩作を自嘲的に語り直す際の「戦略的自己提示」は、この空間的緊張を修辭的に活用したものとして理解される。

Fam. X, 3 は、カルトゥジオ会修道士となった弟ゲラルドに宛てた長大な書簡であり、7年間の沈黙を破って書かれたものである。ペトラルカは冒頭で、長い沈黙の理由を「弟の修行の静謐を妨げることを恐れたため」と記述している。しかし、この沈黙はもはやゲラルドのためではなく「自分自身のために」破られると宣言される²⁶⁾。書簡の根底にあるのは、修道者として「キリストの兵士」となった弟と、いまだ世俗の絆に囚われた自己との対照である。

この書簡において詩学上とりわけ重要なのは、かつての恋愛詩の制作を回顧する箇所である。ペトラルカは弟に次のように語りかけている。

私たちはどれほどしばしば音節をねじ曲げ、言葉を移し替えたことでしょうか。要するに、消し去ることができない以上、少なくとも羞恥によって覆われるべきであったあの愛を、人々に受け入れられる形で歌うために、いったいどれほど多くの工夫を重ねたことでしょうか。²⁷⁾

「音節をねじ曲げ」「言葉を移し替えた」という表現は、詩作の技術的操作を極めて具体的に、しかも自嘲的な調子で描いている。これらの語は、第一章で論じた「覆い」や「形象の変換」という詩学的概念の、いわば生の素材を露呈している。『戴冠式演説』においては高貴な知的営みとして提示された「形式の変換」が、ここでは恥ずべき情欲を隠蔽するための苦肉の策として語り直されているのである。Guérin (2016: 248-249) が分析するように、ペトラルカはラテン散文において自らの俗語作品を一貫して周縁化し、「詩 (poesia)」の名を冠することすら避ける傾向にあった。

しかし、この自嘲を額面通りに受け取ることはできない。修道者という宛先に応じた戦略的な自己提示であり、世俗の虚栄を断罪する語り口は弟の選んだ道の正しさを確認すると同時に、否定を通じて詩人の営みをかえって際立たせる逆説的效果を生んでいるのである。*Fam.* X, 3 において世俗の恋愛詩を否定したペトラルカは、続く *Fam.* X, 4 の冒頭で、一転して弟の予想される反応を先取りする。ペトラルカは、書簡に同封した『牧歌』第一歌を弟が「あなたの誓願にそぐわず、志に背くものとして」拒むであろうことを見越し、次のように記している。

何も性急に判断してはなりません。知らないものについて判断することほど愚かなことがある

でしょうか。詩学は神学に決して敵対するものではないのです。驚かれますか？私はほとんど、神学とは神についての詩であると言いたいほどです。キリストがあるときは獅子、あるときは子羊、あるときは蠕虫と呼ばれること、これこそ詩的でなくて何でしょうか。²⁸⁾

「神学とは神についての詩である」という断言は、第一章の戴冠式演説において「曇った空と晴れやかな空」の比喻で示された詩と神学の類縁関係を、はるかに踏み込んだ形で表明している。ここでは、聖書そのものが詩的技法——比喻、寓意、形象の変換——を用いているという事実が、詩学の神学的正当性の根拠として援用されているのである。

ペトラルカはさらに、この詩的言語の本質を *alieniloquium*（「別のことを言うこと」＝寓意）という概念によって規定している。

福音書における救い主の譬えとは、感覚から離れた言葉、すなわち一語で言えば、「別のことを言うこと」、より慣用的な語彙で言えば寓意と我々が呼ぶもの以外の何を響かせているのでしょうか。そして、まさにこの種の言葉から詩のすべてが織りなされているのです。ただし、主題が異なるのです。²⁹⁾

「ただし、主題が異なるのです」という簡潔な留保は、きわめて重要である。ペトラルカは、詩と神学が同一の言語的操作を共有しつつも、その対象において区別されると主張している³⁰⁾。この区分は、詩を神学に従属させるのでもなく、逆に同一視するのでもなく、両者を同じ言語的原理に基づく並行的な営みとして位置づけるものである。Guérin (2016 : 245-246) が指摘するように、ペトラルカは中世的な神学者の寓意と詩人の寓意の区別を踏まえつつも、両者の修辭的同一性を積極的に主張する立場をとっていた。

しかし、*Fam. X, 4* の核心はこの詩の理論の陳述にとどまらない。この書簡の真の意義は、ペトラルカがこの原理を自らの作品に対して実践する点にある。

これは、それを作った者自身から聞かなければ理解できない種類のものですから、あなたが無駄に疲れることのないよう、まず何を言っているのか、次に何を意図しているのかを手短に説明しましょう。³¹⁾

Lummus (2020 : 129) はこの自己注解を作者＝解釈者という自己完結的権威の構造として位置づけるが、本稿はさらにそれを制度論的に読む。この実践は、『特権状』が付与した「解釈する」権能の書簡的具現にほかならない。「それを作った者自身から聞かなければ理解できない」という宣言は、詩的テキストの意味が作者の介入なしには完全に開示されえないことを明言するものである。これは、第一章で論じた『特権状』の「解釈権」が、ここでは自作の解釈者という形で具体化されていることを意味している。

ペトラルカが記していく寓意解釈の具体的な内容は、この原理の実演である。「対話する羊飼いたちは我々です。私がシルウィウス、あなたがモニクスです」という宣言³²⁾ に始まり、牧歌的風景のすべてが体系的に知的・倫理的意味へと読み替えられていく。

「近づき難い山の頂」とは、稀有な人が手にした名声と気高さです。この頂上に対してモニクスは、シルウィウスが「汗水垂らして」喘いでいるのを非難しています。また、この名声にはほとんどの人が辿り着けません。シルウィウスが「彷徨っている」と言われている「砂漠」とは学問研究のことです。本日は、実際、これは本当に砂漠化しています。また、利益欲によって見捨てられており、才能ある人たちの怠惰によって希望が失われています。「苔に覆われた崖」とは、苔のように富をまとった権力者や富裕層のことです。「こだまを響かせる泉」は、文学を弁えた雄弁な人たちのことです。その深い才能から、学識の川が心地よい音を立てて流れ出ます。³³⁾

注目すべきは、この自注が単なる語句の対応表に留まらない点である。「砂漠」が学問研究そのものを指し、それが「本当に砂漠化している」という嘆きは、詩の寓意を解くことが同時に時代批判を遂行する行為となっていることを示す。自注は、テキストの意味を固定するのではなく、新たな批判的言説を生成する装置として機能しているのである。

なお、この書簡は詩の弁護を詩の形式面にも及ぼしている点で見逃せない。ペトラルカは、旧約聖書の書物がヘブライ語においては韻文であったことを援用し、ダヴィデを「キリスト教徒の詩人 (Cristianorum poetam)」と呼ぶ³⁴⁾。さらに詩の形式を内容から切り離す態度を「土の器に盛られた料理を褒めながら、金の皿に盛られた同じ料理に嫌悪感を抱くのは、狂気か偽善のどちらかでしょう」と批判し³⁵⁾、詩的形式(「金の器」)が内容を高める「器」として正当化されることを示している。

Fam. X, 4 が詩と神学の並行性を確立したとすれば、続く *Fam.* X, 5 はその射程をさらに広い人間存在の条件へと拡張する。書簡冒頭でペトラルカは、アウグスティヌスに依拠して「人間の学問的営みと情動とは互いに不一致である」という命題を取り上げ³⁶⁾、人間の生を快楽・活動・観想の三つの道に区分したうえで、各道においても学芸の方向が驚くほど分岐していることを強調する³⁷⁾。

しかし、ペトラルカの議論は多様性の称揚にとどまらない。むしろ彼は、この分岐した諸学芸が神という中心を失うならばたちまち空疎な虚栄へと墮落することを繰り返し示唆する³⁸⁾。ペトラルカによれば学問は神を中心として秩序づけられるときにのみ正当な方向を持ちうるのである³⁹⁾。

この観点は詩人の位置づけに直接関わってくる。ペトラルカは、第三の観想の道の内部においてもなお多くの小径があるとし、「開けた場所を避けるかのように影を好み、少数の人々に見られ、学問的探究によって求められることを望む者」こそが「詩人たち (Hi sunt poete) である」と定義する⁴⁰⁾。ここで詩の難解さや隠蔽性は、知的怠惰や装飾ではなく、真理を守るための戦略的な形式として理解される。第一章で確認した、詩人が真理を「覆い」によって保護しつつ段階的に開示するという構図が、ここでは知の多様性と不一致の世界を前提とした上で、真理を限られた者へ届ける形式として再定義されているのである。

したがって *Fam.* X, 5 は、詩人という役割が分裂した人間世界の中でいかなる位置を占めうるかを、神を中心とする秩序の観点から再定義するテキストである。多様性と不一致を前提としながら、なお神へと向けて秩序を回復しようとする媒介者として詩人は位置づけられる。

こうして、第一章において制度的に画定された「読み、論じ、解釈する」権能は、ゲラルドとい

う特定の宛先に向けた書簡空間において、詩人が自らの過去の作品を読み直し、その意味を受容者に応じて調整し、提示し直すという実践として具体化される。この操作は、まさしく詩人が「覆い」を施し、またそれを自ら解き明かすという、戴冠式演説で確認された二重の原理の、書簡空間における実践的適用にほかならないのである。

3. 論争者としての詩人——『医者論駁』における詩の擁護と知の序列

制度的に承認され（第一章）、書簡的实践において運用されてきた（第二章）詩人の役割は、本章では外部からの批判に晒される論争空間の中で防衛される。その舞台となるのが『医者論駁』である。この論争の契機となったのは、1352年に教皇クレメンス六世がアヴィニョンで重病に倒れた際の出来事であった。ペトラルカは共通の友人を介して教皇に忠告を送り、さらに *Fam. V*, 19 において医学界を痛烈に批判する書簡を執筆した。これが教皇の侍医の反発を招き、一連の応酬の末に四巻から成る『医者論駁』として結実したのである⁴¹⁾。表面的にはこれは一人の詩人と一人の医者との口論にすぎないが、その本質は「修辞学と医学の初期的対決」であり、「人文主義と科学、少なくとも擬似科学との原始的遭遇」であった⁴²⁾。

『医者論駁』の議論を追う際にまず確認すべきは、ペトラルカ自身が批判の対象を明確に限定している点である。

私が批判したのは——よく覚えています——技芸そのものではなく、技芸に携わる者たちです。しかもそのすべてではなく、傲慢で不和をもたらす者たちだけです。⁴³⁾

「技芸 (artificium)」と「それを担う人間 (artifices)」との区別は、論駁全体を貫く前提である。彼は医学という学知を全面的に否定しているのではなく、その知の運用の仕方を問題にしている。したがって争点は、神から与えられたはずの知が虚栄と支配欲に奉仕するものへと堕していることにある。ここでもやはり、問題の核心は知の正しい秩序づけなのである。

この「秩序づけ」の問題は、自由学芸と機械的技芸の位階をめぐる議論として展開される。ペトラルカは、精神を扱う自由学芸と身体を扱う機械的技芸の区別を繰り返し前景化し、医学を後者に分類する。ペトラルカが独自に強調するのは、この位階が転倒されているという現状認識である。

あなたは一体何をしでかすつもりだというのでしょうか。修辞学を医学の下に置くとはい、前代未聞の冒瀆ではないでしょうか。侍女に女主人を仕えさせ、機械的技芸に自由学芸を従えさせるとは。⁴⁴⁾

「侍女に女主人を仕えさせる」という比喩は、単なる学問分類の問題ではなく、知の秩序そのものの倒錯として提示されている。Lummus (2020 : 136-138) がこの構造を「外部性の優位」と呼ぶのに対し、本稿はそれを認識論的に読む。詩人の「外部性」とは地理的・政治的位置の問題ではなく、スコラ学的序列の「最下位」に置かれた詩人が、その体系の外に立つことで新たな認識論的地位を確保しようとする運動である。さらにペトラルカは「なぜ医学よりもむしろ航海術に修辞学を

従わせなかったのでしょうか」と挑発し⁴⁵⁾、医者論が医学にのみ妥当するという根拠を崩している。Struever (1993: 664) が強調するように、「自由学芸」の「自由」とは人間精神を解放へ向け導く実践そのものを意味しており、この「解放する実践」が身体的必要に奉仕する技芸の下に置かれることは、知の秩序の根本的な転倒にほかならないのである。

知の序列の転倒は、医者たちの言説的実践そのものにおいても現れている。ペトラルカは、医者たちの言葉が対象から遊離した空疎なものに堕していると繰り返し批判する。彼らの言説は「常にスコラ的であって、決して成熟した学識者や教師にはならない (semper scolastice literator, nunquam literatus aut magister)」⁴⁶⁾ のであり、弁証法は本来「手段 (via)」であるべきものが「目的 (terminus)」と化してしまっている⁴⁷⁾。

さらに、教皇クレメンス六世の病をめぐる具体的な場面において、医者たちの不一致が暴かれる。

ああ、もし——そのようなことを口にするのも恐ろしいが——たとえ彼が不死なる神の代理者であるとはいえ、彼自身は死すべき人間なのだから、もしそのとき自然に負うべき負債を支払っていたならば、あなた方の間にはどれほど大きく、しかもどれほど決着のつかない争いが起こっていたことだろうか。すなわち、脈拍について、体液について、危機な日について、薬について、互いに争っていたに違いないのである。⁴⁸⁾

ここで問題となっているのは、医学的知識の不完全性それ自体ではない。不確実な対象を扱っているにもかかわらず確実性を装って権威的に振る舞う医者たちの態度こそが批判の焦点である。これは、第二章で *Fam. X, 5* が描いた「人間の学問的営みと情動の不一致 (discordare secum studia hominum et affectus)」というテーゼの具体的事例である。医者たちは不一致の内部にありながら、自らを真理の所有者として演出しようとしている。これに対してペトラルカが擁護するのは、真理への間接的接近を引き受ける知としての詩と修辞である。

詩そのものの擁護に際し、ペトラルカはキケローの権威を援用して詩人の神的靈感を確認したうえで⁴⁹⁾、ボエティウス誤読をめぐるくだりにおいて「真のムーサたち」の働きを次のように言い表す。

もしあなたが、これほど軽率に論じている事柄のいずれかを学んでいたならば、ボエティウスが言及するあの劇的詩が、詩人自身のあいだでは高く評価されていないことを知っていたでしょう。しかし盲目のあなたは、それがすぐそばにあることすら見ていません。しかもその言葉を、自分の書簡の中に無自覚のまま書き込んでさえいるのです。彼はこう言っています。「彼を真のムーサたちに委ね、そこで治療され、癒されるに任せよ」と。このムーサたちこそ、今日もし詩人がどこかに残っているならば、彼らが誇りと信頼を寄せている存在なのです。詩人たちは彼女たちの助けによって、病んだ身体を犠牲にすることではなく、病んだ魂を助けることを学んできたのです。⁵⁰⁾

「病んだ身体を殺すのではなく、病んだ魂を助ける」という対句は、『医者論駁』全体における

詩人の役割の最も簡潔な定式の一つである。身体に直接働きかける医学と、魂に働きかける詩とが対照され、後者により高い倫理的意義が認められている。この区別は第二章 *Fam. X, 4* における *alieniloquium* 論とも連続している。詩は真理を間接的に語ることによって魂の側に作用する。ここでの「作用」は、単なる感情的慰撫ではなく、精神の秩序回復に向けた働きとして理解されているのである。

詩の擁護を最も直接的に理論化するのが、ラクタンティウスを引用しながら放つ、以下の言説である。

さて、あなたが攻撃していた虚構の話に戻しましょう。それでは聞いてください。あのラクタンティウス、つまり、詩人と哲学者の知識において、キケロ的雄弁において、そして——それらすべてを超えて——カトリックの信仰において卓越した人物である彼が、その著作『神学提要』第一巻でこう述べています。「詩的放縦さ (*poetica licentia*) の限度がどこにあるのか、また虚構によってどこまで進むことが許されるのかを、人々は知らない。詩人の役割とは、真実である事柄を、別の姿において、斜めの形象によって、ある種の美しさを伴って変形し、表現することにある。しかし語るすべてのことを完全に作り話にするならば、それはすなわち、詩人というよりも愚者であり、あるいは嘘つきである。」驚いているのですか、野獣よ、おそらくあなたは、こんなことはこれまで一度も聞いたことがなかったのでしょうか。⁵¹⁾

第一章でも参照したラクタンティウスの定義が、ここでは論争の武器として再使用される。この再使用こそが、詩人の「媒介者」としての資格を論争的に正当化するのである。詩人の職務は「現実と真であるもの」を「別の姿」において「婉曲的な形象」によって「しかなるべき *decorum* (品位・適切さ) を伴って」移し替えることにある。「すべてを作り事としてでっちあげる者」は詩人ではなく「愚者あるいは嘘つき」だというラクタンティウスの言い切りは、詩を虚構そのものと同一視する医者議論を根底から崩している。

Struever (1993: 664-665) が論じるように、ここで重要になるのは「信頼 (*fiducia*)」の概念である。情念は身体健康にも道徳的・市民的健康にも影響を及ぼし、医者と弁論家＝詩人は、ともにこの心身の交差領域に働きかける存在である。しかし決定的な差異は、医者が外部から治療を施すことを自任するのに対し、詩的言説は読者や聴者の内側に自己認識と自己調整の契機を呼び起こす点にある。ペトラルカにとって健康とは「自分が住まう身体に対する精神の把握」であり、「信頼は自己信頼であり、説得は自己説得」なのである⁵²⁾。

すなわち、詩人とは真理の所有者ではなく、他者の魂の中に真理への運動を開始させる者である。詩は知識の伝達装置であるよりも、自己認識を活性化する装置であり、そこにこそ三段論法的弁証法には達しえない固有の実践的効果がある。

こうして、『医者論駁』において展開される詩人像は、第一章・第二章で確認した諸契機を論争空間の中でより鮮明に再定式化する。医者批判の中心にあるのは、空疎な饒舌、不一致、虚偽、そして知の序列の転倒である。それに対して詩人は、神を源泉とする知の秩序を守りつつ、真理を直接ではなく媒介を通して提示し、身体ではなく魂に働きかける者として擁護される。第三章において詩人の役割は論争を通じてその普遍性を主張するに至る。媒介者としての詩人は、この緊張の間

を往還する存在にほかならない。『医者論駁』は詩を単に防衛するテキストではない。詩人という存在が、分裂した知の世界の中でなお真理の媒介と秩序の回復を担いうることを、公共空間において臆することなく宣言する場なのである。

おわりに

本稿は、『戴冠に関する特権状』と『戴冠式演説』、『牧歌』第一歌と *Fam.* X, 3-5、そして『医者論駁』を横断しながら、ペトラルカにおける詩人の責務を、異なる言説空間における変奏として跡づけてきた。三章を通じて示されたのは、詩人が制度・実践・論争という三つの場面のそれぞれで「読む者・解釈する者・記す者」という三重の役割を担っており、しかもそのいずれもが公共性と不可分であったという事実である。

この連関から浮かび上がるのは、ペトラルカにとって詩人とは、単に美しい言葉を書く者でも、内面を表白する者でもなかったということである。詩人とはむしろ、真理を剥き出しのまま差し出すのではなく、それが受容者の魂に届きうるよう、形式を選び、媒介を設計し、読解の運動を導く者であった。本論が繰り返し示したように、その卓越性は情報の所有ではなく、作用の形式の統御にあった。したがって、詩人の責務とは、真理を所有すると主張することではなく、真理が働きうる条件を整えることに存する。

この意味で、ペトラルカの詩人論は詩の弁護にとどまらず、公共的役割としての詩人の再定義である。戴冠式ではその資格が「読む・論じる・解釈する」権限として制度的に承認され、ゲラルド宛書簡では宛先に応じた自己注解として実践され、『医者論駁』では他の知の領域に対して自己の有効性を主張する論争的言説として展開された。一貫しているのは、詩人が古典を読み、その意味を解釈し、その解釈に基づいて現在の世界を記すことで、共同体のうちに知の秩序と記憶の持続を担うという公共的実践の意識である。

こうした詩人像の公共的実践論としての側面は、Lummus (2020) が分析した同時代の詩人論との比較において、さらなる検討を要する。ムッサート、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョが各々「都市の詩人」「都市なき詩人」「都市を超えた詩人」「都市のための詩人」として対置されうるとすれば、本稿が明らかにした「知の媒介者」像がペトラルカに固有の認識論的選択として際立つかどうかを問うことは、今後の課題としたい。

【原典】

- Fam.* F. Petrarca, *Le familiari*, edizione critica a cura di V. Rossi, 4 voll., Sansoni, Firenze vol. I, 1933; vol. II, 1934; vol. III, 1937; vol. IV (a c. di U. Bosco), 1942
- Coll. laur.* F. Petrarca, *Collatio laureationis*, in *Opere latine*, vol. II, a cura di A. Bufano, con la collaborazione di B. Aracri e C. Kraus Reggiani, introduzione di M. Pastore Stocchi, Milano, UTET, 1975. pp. 1256-1282.
- Priv. laur.* F. Petrarca, *Il Privilegium Laureationis*, in *La Collatio Laureationis. Manifesto dell'Umanesimo europeo*, a cura di Giulio Cesare Maggi, Testo latino a fronte, 2012, pp. 102-115.
- Inv. med.* F. Petrarca, *Invective contra medicum; Invectiva contra quendam magni status hominem sed nullius scientie aut virtutis*, a cura di F. Bausi, Le Lettere, Firenze 2005.

【欧語参考文献】

- Frasso, G.
2001 *Appunti sulla 'difesa della poesia' e sul rapporto 'teologia - poesia' da Dante a Boccaccio*, in *Verbum: Analecta Neolatina*, 3, no. 1, pp. 1-17.
- Gerosa, P. P.
1969 *Umanesimo cristiano del Petrarca: Influenza agostiniana; Attinenze medievali*, in *Speculum*, 44, no. 4, pp. 317-337.
- Guérin, P.
2016 *Poesia*, in *Lessico critico petrarchesco*, a cura di L. Marcozzi and R. Brovia, Roma, Carocci, pp. 248-249.
- Leclercq, J.
1991 *Temi monastici nell'opera di Petrarca*, in *Lettere italiane*, 43, pp. 42-55.
- Looney, D.
2009 *The Beginnings of Humanistic Oratory: Petrarch's Coronation Oration (Collatio laureationis)*, in *Petrarch: A Critical Guide to the Complete Works*, edited by V. Kirkham and A. Maggi, Chicago, University of Chicago Press, pp. 131-140.
- Lummus, D. G.
2020 *The City of Poetry: Imagining the Civic Role of the Poet in Fourteenth-Century Italy*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Marcozzi, L.
2002 *La biblioteca di Febo: Mitologia e allegoria in Petrarca*, Firenze, Cesati.
- Marsh, D.
2015 *Petrarch's Adversaries: The Invectives*, in *The Cambridge Companion to Petrarch*, edited by A. R. Ascoli and U. Falkeid, Cambridge, Cambridge University Press, pp. 167-176.
- Morganti, B. F.
2018 *A leitura petrarquista do Pro Archia de Cícero e a defesa da poesia*, in *Cícero: Obra e recepção*, edited by I. T. Cardoso and M. Martinho, Coimbra, Imprensa da Universidade de Coimbra, pp. 151-179.
- Pozzi, G.
1989 *Petrarca, i Padri e soprattutto la Bibbia*, in *Studi petrarcheschi*, 2, pp. 125-169.
- Ronconi, G.
1976 *Le origini delle dispute umanistiche sulla poesia: (Mussato e Petrarca)*, Roma, Bulzoni.
- Struever, N.
1993 *Petrarch's Invective contra medicum: An Early Confrontation of Rhetoric and Medicine*, in *MLN*, 108, no. 4, pp. 659-679.
- Wilkins, E. H.
1951 *The Making of the "Canzoniere" and Other Petrarchan Studies*, Roma, Edizioni di Storia e Letteratura, 1951.
- Zak, G.
2016 *The Ethics and Poetics of Consolation in Petrarch's Bucolicum Carmen*, in *Speculum*, 91, no. 1, pp. 36-62.

【邦語参考文献】

- 伊藤博明『ルネサンスの神秘思想』東京：講談社、2012年。
- ウンベルト・エーコ（監訳：和田忠彦；編訳：石田隆太・石井沙和）『中世の美学——トマス・アキナスの美の思想』東京、慶應義塾大学出版会、2022年。
- E. R. クルツィウス（南大路振一・岸本通夫・中村善也訳）『ヨーロッパ文学とラテン中世』、東京、みすず書房、1971年。
- ジョン・マレンボン（周藤多紀訳）『中世哲学』東京、岩波書店、2023年。

注

- 1) Cfr. Cic. *Pro Arch.* 18.
- 2) Cic. *Pro Archia*, 18-19. ペトラルカにおけるこの弁論の受容については、Morganti (2018) を参照されたい。
- 3) Mussato, *Epistola* 7, vv. 31-34: «Invenere sacri quondam figmenta poetae:/ alliciant animos mystica verba bonos,/ quo magis attentos facit admiranda poesis/ cum secus intendit quam sua verba sonent». また、Morganti (2018 : 164, nota 36) も参照されたい。
- 4) こうしたムッサートからペトラルカ、あるいはボッカッチョなどに至る詩人論は、「詩の擁護」と呼ばれている。これについては、クルツイウス (1971:310-330) や伊藤 (2012:24-54)、Ronconi (1976)、Frasso (2001) を参照されたい。
- 5) Cfr. *Fam.* X, 4, 2. とりわけ第二章を参照のこと。
- 6) Cfr. Wilkins (1951) ; Looney (2009) を参照されたい。
- 7) Cfr. Gerosa (1969) ; Pozzi (1989) ; Leclercq (1991) ; Zak (2016) を参照されたい。
- 8) Cfr. Struever (1993) ; Marsh (2015) を参照されたい。
- 9) Wilkins (1951 : 21-22).
- 10) *Priv. laur.* IV, 2: «praefatum Franciscum hodierno videlicet paschalis solemnitate die, in Capitolio Romano, locorum celeberrimo, tam dicti regis quam nostro et populi Romani nomine, magistrum, poetam et historicum declarantes, praeclaro magisterii nomine insignivimus et, in signum specialiter poesis, nos, Ursus comes et senator praefatus, pro nobis et pro collega nostro, coronam lauream nostris manibus capiti eius imposuimus».
- 11) *Priv. laur.* II, 3: «Inter multa nimirum, quae animi viribus geruntur, ut ad praesens de corporeis actibus taceamus, florentissimum atque omni laude dignissimum quondam in nostra re publica historicorum ac praecipue poetarum studium fuit, quorum industria ac labore tam sibi ipsis quam aliis claris viris, quos suis dignabantur nobilitare carminibus, nominis immortalitas quaerebatur».
- 12) Lummus (2020 : 114).
- 13) *Coll. laur.* IX, 4: «officium poete in eo sit ut ea que vere gesta sunt in alia specie, obliquis figurationibus, cum decore aliquo conversa traducat».
- 14) *Priv. laur.* II, 10: «Hoc nempe poeticum decus aetate nostra, quod dolenter referimus, —incertum qua seu ingeniorum tarditate seu temporum malitia— usque adeo abolitum videmus, ut etiam, quid per ipsum poetae nomen importetur, paene incognitum nostris hominibus habeatur opinantibus multis, poetae officium nil esse aliud quam fingere, id est mentiri. Quod si ita esset, prorsus et laurea et omni honore indignum officium videretur. Ignorant autem poetae officium, sicut ab eruditissimis et sapientissimis viris accepimus, in hoc esse, ut veritatem rerum sub amoenis coloribus absconditam et decora velut figmentorum nube contextam altisonis celebrent carminibus et dulcis eloquii suavitate respergant, quo scilicet quaesitu difficilior magis atque magis inventa dulcescat».
- 15) *Coll. laur.* IX, 7: «Sed, si tempus non deforet nec vereretur auribus vestris inferre fastidium, possem facile demonstrare poetas, sub velamine figmentorum, nunc physica, nunc moralia, nunc historias comprehendisse, ut verum fiat quod saepe dicere soleo: inter poetae et historici et philosophi, seu moralis seu naturalis, officium hoc interesse quod inter nubilosum et serenum caelum interest, cum utrobique eadem sit claritas in subiecto, sed, pro captu spectantium, diversa».
- 16) なお、ペトラルカにおける詩学的文脈での velamen の用例は *Coll. laur.* IX, 7 («sub velamine figmentorum») および *Inv. med.* I, 164 («pulcris velaminibus») にほぼ限定され、体系的術語というよりも文脈依存的な概念である。本稿が「覆い」として統一的に扱うのは、「真理を覆う外的層」という基底の意味構造の共有に基づく。
- 17) *Priv. laur.* IV, 4: «dantes eidem tam in dicta arte poetica atque in historiis quam in omnibus spectantibus ad easdem, auctoritate praefati domini regis, senatus et populi Romani, tam in hac sacratissima urbe, quae omnium urbium ac terrarum caput esse non ambigitur et magistrum, quam alibi ubicumque locorum, legendi, disputandi, interpretandi veterum scripturas et novos ex se ipso, omnibus saeculis auxiliante Deo mansuros, libros ac poemata componendi liberam tenore praesentium potestatem».
- 18) エーコ (2022 : 188)。
- 19) エーコ (2022 : 188-189)。
- 20) テクストの意味を文字通りの意味 (sensus litteralis)、寓意的意味 (sensus allegoricus)、道徳的意味 (sensus tropologicus)、神秘的意味 (sensus anagogicus) の四層において読み解くこの解釈体系のことである。なお、

- Marcozzi (2002 : 33-34) が指摘するように、ペトラルカ自身は四義の全体を自らの詩学に適用したわけではなく、むしろ道徳的な意味のみを重視した。
- 21) たとえばこうした緊張関係は、パリ大学における神学部と学芸学部との応酬にもみられる。1277年にパリ司教エティエンヌ・タンピエが発した禁令は、芸術学部の教師たち（哲学者）が神学的命題に関して越権的な言説活動を行うことを包括的に禁止するものであり、神学者以外の知識人が解釈の領域に踏み込むことに対する制度的な抑圧が現実には作動していたことを示している（cfr. マレンボン（2023 : 79-87））。
 - 22) 『農耕詩』第3巻、291-292行「しかし甘美なる愛は、私をパルナッソスの人気のない険しい道へと駆り立てるのだ」。
 - 23) *Coll. laur.* 1: «Hodierno die, magnifici ac venerabiles viri, poetico mi<c>hi more procedendum est; et idcirco propositionem meam non aliunde quam ex poeticis scripturis elicui».
 - 24) Wilkins (1951 : 36): «The structure of the Oration is that of a medieval sermon, with the text and supporting quotations drawn from classical sources»（この演説の構造は中世の説教のそれに倣うものであり、その主題となるテキストおよびそれを支える引用は、古典的諸典拠から引き出されている）。
 - 25) Looney (2009 : 134-135): «He intones the passage from the Georgics and then begins his careful and extended explication of it as a church father might treat a passage from the Bible. Like a speaker trained in homiletics, Petrarch delivers a speech that is similar in its form to that of a medieval sermon, dramatizing his encounter with the passage, weighing every word, considering every possible meaning, calculating its impact on the audience».
 - 26) *Fam.* X, 3, 1: «Timui hactenus tyrocinii tui quietem interrumpere; fugere te strepitum, amare silentium sciebam; me vero si semel inciperem, haud facile desitutum; is amor tui est, ea rerum tuarum admiratio»（これまで私は、あなたの修練の静けさを妨げることを恐れていました。あなたが騒音を避け、沈黙を愛していることを私は知っていたからです。したがって、私自身は、ひとたび語り始めれば、容易にはやめることができないでしょう。それほどまでに、あなたへの愛情と、あなたの事柄への感嘆が大きいです）。
 - 27) *Fam.* X, 3, 21: «Quotiens sillabas contorsimus, quotiens verba transtulimus, denique quid non fecimus ut amor ille, quem si extinguere non erat, at saltem tegi verecundia iubebat, plausibiliter caneretur?».
 - 28) *Fam.* X, 4, 1: «Noli aliquid temere diffinire; quid enim stultius quam iudicare de incognitis? theologie quidem minime adversa poetica est. Miraris? parum abest quin dicam theologiam poeticam esse de Deo: Cristum modo leonem modo agnum modo vermem dici, quid nisi poeticum est?».
 - 29) *Fam.* X, 4, 2: «Quid vero aliud parabole Salvatoris in Evangelio sonant, nisi sermonem a sensibus alienum sive, ut uno verbo exprimam, alieniloquium, quam allegoriam usitatori vocabulo nuncupamus? Atqui ex huiusce sermonis genere poetica omnis intexta est. Sed subiectum aliud».
 - 30) Cfr. Guérin (2016 : 245-246).
 - 31) *Fam.* X, 4, 12: «Sed quoniam id genus est quod nisi ex ipso qui condidit auditum, intelligi non possit, ne te inutiliter fatiges, primo quid dicam, deinde quid intendam brevibus explicabo».
 - 32) *Fam.* X, 4, 20: «Pastores colloquentes nos sumus; ego Silvius, tu Monicus».
 - 33) *Fam.* X, 4, 23: «“Inaccessum cacumen” ad quod “multo sudore” Silvium anhelare Monicus exprobrando obicit, fame rarioris et ad quam pauci perveniunt, altitudo est. “Deserta” quibus “vagari” Silvius dicitur, sunt studia; hec vere deserta hodie et vel lucri cupidine derelicta vel ingeniorum desperata segnitie. “Muscosi scopuli” sunt potentes ac divites, patrimonio velut musco obsiti; “fontes sonantes” literati et eloquentes homines dici possunt, quorum ex ingenii scatebris disciplinarum rivuli prodeunt cum sonitu quodam delectabili»
 - 34) *Fam.* X, 4, 6: «et Veteris Testamenti Patres heroyco atque aliis carminum generibus usi sunt: Moyses Iob David Salomon Ieremias; Psalterium ipsum daviticum, quod die noctuque canitis, apud Hebreos metro constat, ut non immerito neque ineleganter hunc Cristianorum poetam nuncupare ausim; quippe quod et res ipsa suggerit et, si nichil hodie michi sine teste crediturus es, idem video sensisse Ieronimum»（旧約聖書の父である、モーセやヨブやダヴィデやエレミヤは、英雄的なものや、詩の他の種類を用いていたのです。あなた方が昼も夜も歌っている、ダヴィデの詩篇は、ヘブライ語の韻律によって構成されています。それゆえ、私はあえて、彼のことを当然かつ優美に彼がキリスト教徒たちの詩人と宣言することにしたのです。というのも、これは明らかなことであり、もし今私の証言なしにあなたが何を信じていないとしても、ヒエロニムスが同じことを考えていたということを私は確認しています）。
 - 35) *Fam.* X, 4, 9: «Laudare dapem fictilibus appositam, eandem in auro fastidire, aut dementis aut ypocrite est. Avari est aurum sitire, non posse pati pusilli animi est».
 - 36) Cfr. *Fam.* X, 5, 4: «Quid enim, cetera ut omittam, illa certius sententia cui astipulator queritur Augustinus,

discordare secum studia hominum et affectus?» (さて、他のことはひとまず置いておくとして、アウグスティヌスが同意者として嘆いているあの命題、すなわち「人間の学問的営みと情動は互いに一致しない」という命題ほど確かなものがあるでしょうか)。

- 37) Cfr. *Fam.* X, 5, 5-12.
- 38) Cfr. *Fam.* X, 5, 10: «Est enim et que naturas rerum omnium inquirat, meditatio pulcerrima, nisi nature dominum obliviscatur, quod iam pene perpetuum illi est» (というのも、万物の本性を探究する学問もあります。これは、もし自然の主を忘れないならば、この上なく美しい思索です。ところが、それを忘れることが、ほとんどこの学問には恒常的になってしまっています)。
- 39) Cfr. *Fam.* X, 5, 8: «Et quamvis veram sapientiam unam esse non sit dubium, Deum nosse et colere, propter quod scriptum est: 'pietas est sapientia', ad quam omnium nobilissimum ac sacratissimum studium hominibus datum erat, nisi illud vanitas nostra corrumpens iam de theologia dyaleticam effecisset, tamen de hac agendum est que vulgo sapientia dicitur, quam rectius scientiam dixerim» (そして、真の知恵がただ一つ、すなわち神を知り、神を敬うことにあるのは疑いありません。そのために「敬虔こそ知恵である」と書かれており、もしもわれらの虚栄がそれを損ない、神学をすでに弁証術に変えてしまっていなければですが、人間にはこの上なく高貴で神聖な学びが与えられていたのです。しかし今ここで論じるべきは、世間で通常「知恵」と呼ばれているものであり、私はそれをむしろ「学知」と呼ぶべきだと考えています)。
- 40) Cfr. *Fam.* X, 5, 12: «Inque his omnibus vie tertie tramitibus sunt qui palam, sunt qui clam pergant et velut apertum evitantes umbris gaudeant, neque se profanari et nimia familiaritate contemni, sed videri a paucis et studio queri velint. Hi sunt poete, nostra presertim etate rarum genus, in quibus ipsis non omnibus idem finis, non eadem via, ut non immerito cum virile hoc et magnificum vatum genus magno semper in precio fuerit, illud humiliter stiloque mollius severis infamie iudiciis habeatur» (そして、この第三の道のすべての小径の中には、公然と進む者もいれば、ひそかに進む者もいます。後者は、いわば開けた場所を避けるかのように影を好み、自らが俗化されることや、過度の馴れ親しさによって軽んじられることを望まず、少数の人にだけ見られ、学問的探究によって求められることを望むのです。これが詩人たちです。とりわけ我々の時代においては、まれな類の人々です。その中においてさえ、すべての者の目標が同じではなく、道も同じではありません。そのため、男らしく壮大なこの予言者、つまり詩人たちの類が常に高い価値を持ってきた一方で、より卑しく、より柔らかな文体の別の類は、厳格な批評家たちによって悪名を受けるのも、もっともなのです)。
- 41) Marsh (2015 : 168).
- 42) Struever (1993 : 659).
- 43) *Inv. med.* I, 15: «Ego quidem — nam memini — non artificium sed artifices improbavi, eosque non omnes, sed procaces atque discordes».
- 44) Cfr. *Inv. med.* I, 65: «Quid te autem non ausurum rear, qui rethoricam medicine subicias, sacrilegio inaudito, ancille dominam, mechanice liberalem?».
- 45) Cfr. *Inv. med.* I, 74: «si, rebus omnibus fortune imperio confusis, artes quoque confundere et liberales mechanicarum servas facere - quod utrarumque prohibebaris nomine - voluisti, cur non potius navigationi quam medicine rethoricam servam faciebas?» (もしあなたが、運命の支配によってすべてのものが混乱させられるように、諸学芸もまた混乱させ、自由学芸を機械的技芸の奴隷にしたかったのなら、なぜ医学よりもむしろ航海術に修辞学を従わせなかったのでしょうか)。
- 46) Cfr. *Inv. med.* III, 254.
- 47) Cfr. *Inv. med.* II, 229: «Sed, o stulte, non hac careo: verum scio quid ei, quid ceteris liberalibus artibus dandum sit; didici a philosophis nullam earum valde suspicere. Equidem, ut eas didicisse laudabile, sic in eisdem senescere puerile est. Via sunt nempe, non terminus, nisi errantibus ac vagis quibus nullus est vite portus» (しかし、愚かな者よ、私はそれ [= 弁証法] を欠いているわけではありません。むしろ私は、それに、また他の自由学芸に、どの程度の価値を与えるべきかを知っております。哲学者たちから、これらのいずれも過度に崇めるべきではないことを学んだためです。確かにそれらを学ぶことは称賛に値しますが、その中にとどまったまま年老いることは子供じみています。というのも、それらは終着点ではなく道だからです。ただし、人生の港を持たずにさまよう者たちにとってのみ、それらは終点となるのです)。
- 48) Cfr. *Inv. med.* I, 43: «O si — quod ominari horreo; sed, licet immortalis Dei vicarius, est tamen ipse mortalis — si ergo tunc nature debitum persolvisset, quanta fuisset inter vos et quam indecisa discordia de pulsu, de humoribus, de die cretico, de farmacia!»
- 49) *Inv. med.* I, 119: «Non legeras apud Varronem, Romanorum doctissimum, neque apud Tullium, quem fidenter - licet forte obstrepas - dixerim principem latinorum, quid de poetis scriptum est? Verba enim ipsa, nequid

me mutasse vel addidisse suspiceris, apposui: “A summis” inquit “hominibus eruditissimisque sic accepimus: ceterarum rerum studia et doctrina et preceptis et arte constare; poetam natura ipsa valere, et mentis viribus excitari, et quasi divino quodam spiritu inflari. Quare suo iure noster ille Ennius sanctos appellat poetas, quod quasi deorum aliquo dono atque munere commendati nobis esse videantur. Sit ergo, iudices, sanctum apud vos, humanissimos homines, hoc poete nomen, quod nulla unquam barbaria violavit” (あなたは、ローマ人の中でも最も博識なウァッロや、私がラテン人の第一人者と断言するトゥッリウスの著作において、詩人について何が書かれているかを読んだことがないのでしょうか。私が何かを変更したり付け加えたりしたと疑われないよう、その言葉そのものをここに引用しておきます。「すなわち、最も優れた人々から次のように伝えられている。すべての学問は教えや規則や技術によって成立するが、詩人は自然そのものの力によって力を発揮し、精神の力によって鼓舞され、いわば神的な霊によって満たされるのである。それゆえエンニウスは詩人を『聖なる者』と呼ぶのであり、彼らは神々の贈り物のような存在である。したがって詩人という名は聖なるものとして尊重されるべきであり、この名はこれまでいかなる野蛮さによっても汚されたことがないのである」)。

- 50) *Inv. med.* I, 147: «Certe siquid eorum de quibus tam temerarie disputas didicisses, scires scenicam illam quam Boetius notat, ipsos inter poetas in precio non haberi. Non autem vidisti, cece, quod iuxta erat, licet id ipsum literis tuis ignoranter insereres. Quid enim ait? “Veris eum Musis curandum sanandumque relinquit”. Hee sunt Muse quibus, si qui usquam hodie supersunt, poete gloriantur ac fidunt, quarum ope non egra corpora mactare, sed egris animis succurrere didicerunt. De quibus si loqui velim, donec cerebro humido ac fluenti tanta res insideat, amens ero».
- 51) *Inv. med.* I, 159: «Sed ad fictiones, quas carpebas, redeo. Audi ergo quid Lactantius, vir et poetarum et philosophorum notitia et ciceroniana facundia et — quod cuncta transcendit — catholica religione clarissimus, primo suarum Institutionum libro ait: “Nesciunt qui sit poetice licentie modus, quousque progredi fingendo liceat, cum officium poete in eo sit, ut que vera sunt in alia specie obliquis figurationibus cum decore aliquo conversa traducat; totum autem quod referas fingere, idest ineptum esse et mendacem potiusquam poetam”. Stupes, belua: nunquam, puto, istud audieras».
- 52) Struever (1993 : 665).

(大阪大学人文学研究科博士後期課程)